

「修養」から「教育」へ

～早大アメリカ遠征と「科学的野球」～

スポーツ文化研究領域

5009A032-2 極本 亮

研究指導教員:石井昌幸 准教授

【序章】

現在スポーツと科学は密接な関係にあり、それは多くの学術的研究からも明らかであろう。一方、早稲田大学のアメリカ遠征によって持ち込まれた「科学的野球」は、現在の科学的という意味とは異なるものであった。例えば、バントを「科学的打撃」と呼び、さらにグラブやスパイクを使用すること、スクイズプレーやワインドアップ投法までもが、「科学的野球」として語られた。本研究では、この早稲田によって持ち込まれたアメリカ流の野球術がどのような経緯で「科学的野球」と名付けられたのかという経緯に着目し、「科学的野球」とはどのようなものであったかを明らかにすることを目的とする。

【第1章】

早稲田大学のアメリカ遠征がどのような変化をもたらしたのかを比較するために、遠征前まで日本野球界の覇者であった一高野球とはどのようなものであったかを明らかにする。

そもそも一高とは、当時、国内で最も難関校であり、いわば次世代の日本を担うエリート達の集まりであった。その一高野球部は「獐猛なる一高式練習」という独自の練習を行っていた。この練習は、「痛みを我慢して行う」といったような非常に非合理的な練習であったのだが、この「獐猛なる一高式野球」を行う背景には、インブリー事件と明治30年から訪れる不振の時期がきっかけとなっていた。

彼らは野球を「精神修養」と位置づけ、さらに「校風発揚の大任」を担うものと理解していた。また一高には「自治共同」という籠城主義を背景とした信念があった。彼らはエリートであるから、全てのことを自分たちで取り決め行っていたのである。だからこそ、次世代の日本を担うものとして、「精神修養」が必要であったのだが、彼らはその「精神修養」を野球に求めたのであった。つまり、野球を「精神修養」の手段として利用したのである。

【第2章】

早稲田大学野球部の設立からアメリカ遠征を経て「科学的野球」が日本に持ち帰られるまでの経緯を追った。その経緯から、「科学的野球」と称される背景を明らかにした。

まず、日本に「科学的野球」が持ち込まれる9年前に、一高にも「科学的」なるものがあった。それは、横浜外人チームから学んだもので、魔球や相手の投手の癖を分析するといったようなものであった。しかし、一高は精神修養が第一義であったため、野球界にとってそれは一大革新とまではならなかった。

一高が日本野球界のトップに君臨していた1901年、東京専門学校（早稲田の旧名）に野球倶楽部が誕生する。1902年には早稲田大学と改称され、早稲田教授のキリスト教社会学者安部磯雄が野球部を設立する。都下の大学に全勝を収めるというアメリカ遠征の条件を満たした早稲田野球部は1905年アメリカ向

かい、現地大学と試合を行った。26戦7勝19敗という結果ではあったが、その後の野球界の一大革新となる野球術とアメリカ人の徳性を学んだ。しかし、帰国した直後の4試合は圧倒的なものではなかった。それを見た観客や新聞は「ハイカラ」と批判したのであった。その「ハイカラ」批判の最中、遠征メンバー橋戸信が安部の勧めにより『最近野球術』という野球書を出版する。この書で早稲田は「ハイカラ」と批判されたアメリカ流の野球術を「科学的」という言葉で強調する。さらに安部はこの野球術に「野球の三徳」という精神修養を付け加えるのであった。当時日本には一高のように野球に精神修養を求めるといふ考えが根強く残っていたからである。しかし、安部による精神修養は一高のような非合理的なものではなく、ある種合理的な精神修養であった。橋戸による「科学的」の強調と安部による「精神修養」のおかげで、「科学的野球」は「ハイカラ」を脱却するのである。

【第3章】

まず朝日新聞、読売新聞を使って、「科学的」という言葉がどのような分野において使用されていたかを分析し、当時の「科学的」という言葉はどのような位置づけにあったのかを検討する。さらに、日露戦争後の国内を漂う大きな流れをつかんだ上で、「科学的野球」と呼ばれるようになったもう一つの背景を明らかにする。

新聞の分析の結果、1. 物理学、医学、化学。2. 宗教。3. 教育。4. その他というような分類が出来た。特に、教育と宗教における「科学的」にかんする記事は、この時代を端的に表すものであった。その背景には早稲田の遠征後の1905年頃から始まるポピュラーサイエンスの流行があった。新聞では「科

学的智識」という言葉が頻繁に使用され、「科学」は国民に広く普及させなければならない知識や考えであるとして教育の一大目標に掲げられていた。さらに、宗教や恋愛、俳句といった一見科学とは無関係なものにこそ「科学的」という言葉が使用された。明治末はまさに「科学萬能の時代」であったのだ。

また日露戦争前後の日本には、従来までの流れとともに多様な価値観を生んだ。それは日本人論に色濃く影響されていた。以前は「日本人優秀説」がほとんどであったが、日露戦争前後には、「国民性反省論」、「個人主義」といった従来まであまり見られなかった考え方が出てくるのである。このような西洋に対して敏感な時期だからこそ、「ハイカラ」批判は生まれたのである。そしてこの批判に対して、早稲田は「科学」という言葉の「教育的」で「百般の事物を推考論定」出来る「萬能」である性質を利用したのである。安部が「科学的野球」につけた精神修養は安部から学生への「教育」であり、それはエリートにとっても大衆にとっても必要な「教育」としての「精神修養」であった。当時の文部省普通学務長澤柳政太郎も「武」的なるものと「科学」は共に必要であったと述べていることから、「科学」は教育的で「武」的なるものとも共存することが明らかとなった。

【終章】

早稲田が持ち込んだ「科学的野球」とは、エリートにとっても大衆にとっても必要な「教育」としての「精神修養」という側面があり、「科学的」というイメージを反映した野球技術であったのである。ゆえに、西洋あるいは、集団主義的なものに敏感であった時期にも関わらず、その後その野球術は、全国各地の中高などにも広がっていったのである。